

# 2026年度精密工学会春季大会報告

## 「心を紡ぐ 精密工学の知と技」

### 1. はじめに

2026年度精密工学会春季大会は、3月17日(火)から19日(木)の3日間、埼玉大学で開催されました。本学での大会は、今回で3回目になります。1回目は1985年(小林昭実行委員長)、2回目は2010年(堀尾 健一郎実行委員長)でした。歴史ある精密工学会の大会ホストとして約1100名の皆様をお迎えできたことは、大変光栄に存じます。

本大会のキャッチフレーズは「心を紡ぐ 精密工学の知と技」と定め、“心”をテーマにしました。昨今の世界情勢に目を向ければ、罪なき多くの人々が紛争に巻き込まれて苦しんでいます。そこでは、科学・技術者の果たすべき責任も厳しく問われています。ご承知のとおり、科学技術は社会を豊かにし、人々が心身共に幸福になるためのものです。そこで、“精密工学の知と技”で“平和を大切に思う心、誰かを、何かを大切に思う心”を紡ぐ大会に致したく準備を進めて参りました。以下、主なイベントごとに開催報告をさせていただきます。

### 2. 学術講演会

3日間で一般講演430件、キーンノート11件の計441件の口頭発表がありました。講演室は2棟に別れて最大10室を使い、計103セッションの講演が行われました(図1)。

初日午後には「学生会員卒業研究発表会」と「学生研究発表会」が開催され、それぞれ68件の口頭発表と、99件のポスター発表がありました。2日目午後開催されたプロフェッショナルセッションでは、研究者6名にご講演頂きました。テーマは「製造業DXに向けた自動工程設計」と「材料のマイクロ構造組織の3D観察技術」で、2室に分かれて同時開催となりました。いずれの会場もほぼ満席になり、多くの皆様にご参加頂きました。埼玉大学にはあまり大きな建物がないため、講演会場が一つの建屋に収まらず、皆様の中には建物間の移動を余儀なくされ、迷われた方々もいらっしやっただかと思えます。案内表示には十分気を遣ったつもりでしたが、この場を借りてお詫び致します。

講演会場の設営では、アルバイトの学生56名が大量の机と椅子を一生懸命に運んでくれました。運営では筋肉痛を抱えつつも、講演会が滞りなく実施できるように積極的に働き、大会を陰で支えてくれました。



図1 学術講演の様子

### 3. 先端技術パネル・機器展示会

展示会のコンセプトは“人事と技術と営業を満足させること”でした。当初の目標を上回る65社の機器展示(66コマ)、4社のカタログ展示、19社のバナー広告、57社のプログラム集広告が集まりました。ご協力頂きました企業の皆様にはあらためて感謝申し上げます。多くの参加者が展示に立ち寄れるように、全日を通して人通りの多い場所に展示会場を配置しました(図2)。また建屋の随所には、カラフルで目立つ掲示物・のぼり旗・デジタルサイネージを設置し、わかりやすい案内と彩りを心がけました。

楽しみながら出会いの機会を増やせるように、名刺と日替わり埼玉銘菓が交換できる試みをしました。また学生研究発表会では、学生と企業の将来につながる出会いを期待して、学生に企業ブースを気軽に巡ってもらう“交流タイム”を設けました。この交流は、その後開催された「学生と企業とのつどい」への良い流れを生み、大勢の参加者が集ってくれました。

最終日は、展示企業の皆様の労をねぎらって、小規模ながらWrap Up Partyを企画しました。埼玉のクラフトビールで乾杯し、展示会を締めくくることができました。

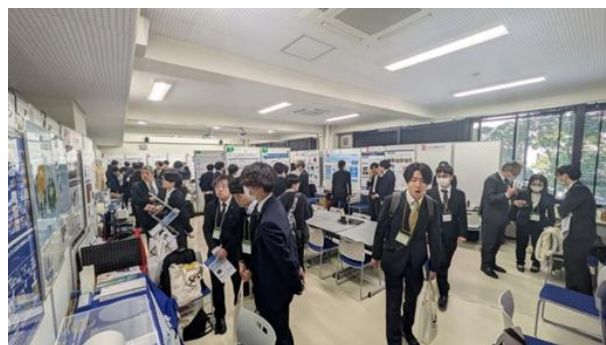


図2 先端技術パネル・機器展示会場の様子

### 4. 教育・研究機関パネル展示会

当初の目標を上回る44機関の大学・高専・研究機関・専門委員会に参加して頂きました。例年、こちらの展示会は目立たず、立ち寄る人も少ないため、出展メリットを感じることができず、研究者の間では“お布施”と呼ばれていました。そこで今大会では、日本工業大学にご協力頂き、誰もが自由に突くことができる「梵鐘」を展示して頂きました(図3)。その音色に癒やされた方も多かったのではないのでしょうか。窓辺には木魚をひたすら叩くお坊さんにもお出まし頂きました。出展の特典には「学生と企業とのつどい」への無料招待を追加しました。研究室の学生さんを連れて参加して頂けたため、つどいは大いに盛り上がりました。また、優れた展示には、実行委員会が厳選して(最)優秀研究ポスター賞を贈呈しました。学会に捧げて下さったお布施のご利益を少しでも感じて頂けたなら幸いです。ご協力頂きました皆様に心より感謝申し上げます。



図3 教育・研究機関パネル展示会場の「焚鐘」

## 5. ランチョンセミナー

全日に亘ってランチタイムには、ランチョンセミナーが開催されました(図4)。これは機器展示をされている企業から希望を募り、各社8分間ずつのプレゼンテーションをして頂く企画です。会場は3室に分かれて1室あたり3~4社/日、合計33社が企業紹介をして下さいました。いずれの会場もほぼ満員で、3日間の参加延べ人数は約660人になりました。とくに初日はお弁当が足りなくなるほどの盛況ぶりでした。プレゼンテーション終了後も昼休みの間は会場を開放し、企業と学生、企業間での交流・情報交換の場として活用頂きました。



図4 ランチョンセミナー会場の様子

## 6. 半導体製造技術シンポジウム

半導体はあらゆる産業活動を支える基盤技術です。生成AIの発展や自動車の智能化を始め、DXの急速な拡大と高度化によって、その役割は増すばかりです。いま、半導体はナノメートルサイズの3次元構造が組み込まれ、微細化と高集積化において終わりのない進化を続けています。

シンポジウムでは、日本半導体製造装置協会(SEAJ)のご協力を得て、世界トップレベルの技術力とシェアをもつ日本の半導体製造装置メーカーにご講演頂きました(図5)。はじめに、シンポジウム基調講演として、Rapidus株式会社 常務執行役員 赤堀浩史氏より、先端半導体製造の現状と課題、さらには、半導体産業の未来像、産業全体が目指すべき方向性についてご講演頂きました。続いて、半導体製造に欠かせない最新制御技術についてアズビルの田中雅人様から、AI/DXを駆使した最新先端技術について東京エレクトロンの田中尚人様からご講演頂きました。今回のシンポジウムでは、産業界とアカデミア・学会の連携が益々重要になっていることを感じました。350名収容の大会場

は、日の丸半導体への並々ならぬ期待で熱気に包まれていました。



図5 半導体製造技術シンポジウム会場の様子

## 7. 学生研究発表会&学生と企業とのつどい

初日夕方に開催された「学生と企業とのつどい」(懇親会)では、機器展示会の参加企業と、学生研究発表および学生会員卒業研究発表会に参加した学生が集い、250名を超える盛況な会となりました(図6)。希望する企業には専用ブースを設置し、パネルやPCを使って企業紹介をして頂きました。学生にとって気軽に情報収集できる良い場となりました。

ここでは、学生会員卒業研究発表会の「優秀講演賞」と、学生研究発表会の「企業賞」の授賞式も行われました。また、事業企画委員会からは『出展企業から学生の皆さんに訊いてみたい20の質問』に対するアンケート結果(回答学生数105名)が発表され、場が盛り上がりました。1時間半と限られた時間でしたが、埼玉の地ビールを片手に企業人と学生が和気あいあいと交流を深めることができました。



図6 「学生と企業とのつどい」会場の様子

## 8. 贈呈式と特別講演会

大会2日目午後の贈呈式では、精密工学会論文賞、沼田記念論文賞、高城賞、研究奨励賞の贈呈があり、加えて名誉会員推薦状、賛助会員感謝状の贈呈も行われました。最後にフェロー認定者、アフィリエイト認定者の発表と、2026年度新役員が紹介されました。

贈賞式に引き続き、ほぼ満席となった大教室では「特別講演会」が開催されました(図7)。埼玉大学理学部分子生物学科 豊田正嗣教授をお迎えし「広視野・蛍光イメージング技術で可視化する植物の感覚」と題してお話を伺いました。豊田教授は、植物でも外部からの刺激に対する感知

や、内部および近傍の個体間で情報伝達機能することを世界で初めて観測によって明らかにした新進気鋭の分子生物学者です。いま国内外から大変注目されており、その重要視が認められて大規模な研究プロジェクトを牽引されています。講演ではオジギソウや野菜といった一般植物に対して遺伝子操作を施し、蛍光イメージングで情報伝達を可視化する観測技術が紹介されました。この新技術を使って植物内部の情報伝達の様子を撮影した動画は聴講者の高い関心を集めていました。

講演を拝聴し、植物内部の現象を明らかにする新観測システムの開発過程は、定量的な加工評価を可能にする精密工学のあゆみとまったく同じだと感じました。講演後には会場から多くの質問があり、活発な質疑応答がなされ、特別講演会は盛況のうちに終了となりました。

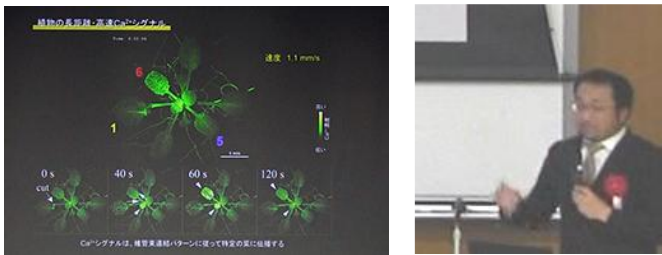


図7 特別講演会で登壇する豊田正嗣教授

## 9. 懇親会

懇親会は、さいたま新都心のTHE MARK GRAND HOTELで開催されました。1年前から準備を進め、ホテル担当者には適切な助言とご配慮を頂きました。大学から会場までは専用バスを使って皆さんをご案内しました。当初300人の参加を想定していましたが、実際には350名となり、会場では少々窮屈な思いをさせてしまったかもしれません。この場をお借りしてお詫び申し上げます。

会場には浦和名物のうなぎコーナーや野菜王国埼玉の美味しい野菜天麩羅コーナー、全国の銘酒を揃えたコーナーを特別に設けました。とくにお酒コーナーは、入手困難な銘酒を日工大 神教授が苦勞して調達して下さいました。また、司会の日大 山田教授には念入りにご準備頂き、終始会場を和やかな雰囲気にして下さいました(図8)。



図8 懇親会会場の様子

## 10. 大会基調講演

前述のように、大会キャッチフレーズは心をテーマにしました(図9)。最終日には技術史をとおして平和の大切さを伝承する大和ミュージアムの戸高一成館長に大会基調講演をお願いしました。当ミュージアムは、設立以来20年間に亘り90万人/年の来場者を記録し続ける希代の科学館です。館長に大会基調講演をご快諾頂けたことは、実行委員会にとって大きな喜びでした。当日は350名収容できる会場がほぼ満席となり、気づきの多いお話を伺うことができました。



図9 大会基調講演の戸高一成館長と会場の様子

## 11. おわりに

今大会はなんとか天候にも恵まれ、多くの皆様のご理解とご支援のもとで無事に終了することができました(図10)。各イベントでは、心揺さぶられ、気づきや心温まる交流が少しでもできたのであれば幸いです。とくに、次世代を担う若手研究・技術者にとって、心に残る大会になったのであれば実行委員会にとって望外の喜びです。至らぬ点多々あったかと思いますが、この場をお借りして重ねてお詫び申し上げますとともに、厚く御礼申し上げます。



図10 2026年度春季大会ポスター

秋季大会は9月15日～17日、東北大学川内キャンパスで開催されます。また次期春季大会は、2027年3月17日～19日に東京農工大学小金井キャンパスで開催されます。是非、奮ってご参加くださいますようお願い申し上げます。最後になりましたが、精密工学会の益々のご発展と会員の皆様のご健勝を心より祈念致します。